様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：８４２０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７６００１６

研究課題名（和文）人口減少後の地域コミュニティとその資源管理

研究課題名（英文）Depopulated rural communities and their resource management

研究代表者
大久保　実香（Okubo, Mika）

滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・学芸員

研究者番号：５０６３６０７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：人口減少が著しい日本の山村集落を対象とし、その地域コミュニティのあり方やその資源管理の現状について、居住者のみでなく他出者らによる出身集落へのかかわりに着目して明らかにした。また、その資源管理の可能性と限界を考察し、その有効策を検討した。他出者が山村集落に果たしうる役割とその特性を整理し、山村集落の継承を考える上で重要な存在であることを示した。共有・共用する資源とそれをめぐる定期的な契機によって人々が直接的に繋がり合い、また、土地に根差した資源を通じて人々と土地とが直接的に繋がりあうといった形で、たとえ居住者がいなくても、山村集落の営みが部分的であれ続いていく可能性を提起した。

研究成果の概要（英文）：This study examined the current situation of rural communities and their resource management in Japanese mountain hamlets under severe depopulation, focusing on the relationships between emigrants and their hamlets of birth. The study discussed roles and features of emigrants in the resource management of depopulated mountain communities, and it was demonstrated that emigrants were important in considering sustainable resource management of depopulated mountain communities. It is possible that mountain communities and their activities can be partially continued, even though there will be no inhabitants, in a manner that people connected with each other through common resources and scheduled opportunities to manage the resources, and people and places connected through immovable resources.

研究分野：地域研究

キーワード：山村　人口減少　村落　他出者

１．研究開始当初の背景

全国レベルでの人口減少が始まる中、交流人口や定住人口の増加といった「人口増加型パラダイム」とは異なる形で家族や地域コミュニティを維持・発展させる可能性の追求が求められており、これは過疎集落にとどまらず、今後の日本の地域社会を考える上で欠かせない議論である（徳野、2010）。

日本の農山漁村では、高度経済成長期以降の人口流出を背景に、居住者の高齢化や減少が進み、農林地の荒廃、集落活動の停滞などの問題が顕在化してきた（大野、1991；2005；小田切、2009）。NPO など多様な主体による棚田や水源林などの管理も試みられており（江成、2000；大野、2005 他）、人口減少とその対応策を考える上で、「限界集落」は先進事例ともいえる。

人口減少後の地域コミュニティの在り方とは、どのようなものなだろうか。また、人口減少が起こった場所とそこにある資源は、どのように維持管理される／されないのだろうか。

２．研究の目的

本研究の課題は、人口減少後の地域コミュニティの変容と現状を、他出者や他出二世、かかわりを持つよそ者の意向や行動も含めて明らかにすることで、その資源管理の可能性と限界を考察し、資源管理における有効策を検討することである。

３．研究の方法

具体的には、他出者らによる出身集落へのかかわりが続く山村を中心的な事例として取り上げた。他出者らもかかわって行われる集落の自治組織の運営のあり方と、集落の資源管理が集落内／外でどのように行われているのかを、明らかにした。

情報収集は、居住者、他出者、他出者二世、I ターン者や山村集落へのかかわりを持つよそ者らを対象とした聞き取り調査、共同作業や祭りなどへの参与観察、文献調査によって行った。

４．研究成果

主な研究成果は、下記にまとめる通りである。

(1) 現在の山村集落における地域コミュニティの在り方やその資源管理の現状について、明らかにした。

① 人口減少後の山村集落において、区・氏子・檀家といった組織や、同族・名付け親といった社会関係、森林・農地といった資源に対し、他出者がどのようにかかわっているのかについてまとめた。（雑誌論文①）

区による共同労働、氏子や檀家による祭り、盆・法事といった行事の存在が、他出者に山村集落へ帰省する理由と定期的な契機を与えていた。これらの契機は、他出者・居住者らが直接顔を合わせる機会となっており、他出者－他出者間、他出者－居住者間の関係性を維持する上で重要だった。山村集落の社会組織や自然資源の存在が、他出者と集落とを繋ぐ役割を果たしていることを示した。

氏子・檀家・同族・名付け親といった日本の農山村でみられる社会関係に、居住者のみならず他出者がどのようにかかわっているのかを示した。このことは、移民や人口減少に関する各国の事例との比較の中で日本の事例を位置づける上でも、一助となる成果である。

② 現在は定住者数がゼロにもかかわらず、出身集落における自治組織が維持され、集落活動が部分的に継続されている山村集落の事例を明らかにした。（学会発表①、学会発表⑤、その他①）

集落の「消滅」や、「廃村」については、その内実が十分に議論されることがないまま、定住者数がゼロになることとほぼ同義で考えられてきた面がある。定住者数がゼロにもかかわらず、自治組織や集落活動が部分的に維持されてきた事例は、「人が住まなくなること＝集落の消滅」とは必ずしも言えないことを示した。共有・共用する資源とそれをめぐる定期的な契機によって人々が直接的に繋がり合い、また、土地に根差した資源を通じて人々と土地とが直接的に繋がりあうといった形で、たとえ居住者がいなくても、山村集落の営みが部分的であれ続いていく可能性がある。

日本の農山漁村を対象とする地域研究では、対象としてきた地域社会の変容により、地域への定住、完結した全体としての村落といった規範的な分析枠組みの前提条件と現実との間にずれが生じ、移動性や持続性を捉える必要性が指摘されている（熊谷、2004）。本研究では、定住とは異なる形で集落を持続させていく可能性があることを示した。また、コミュニティと場所との結びつきに関する問題はコミュニティ研究における課題の一つであるが（デランディ、2006）、本研究は、定住に基づかない人々が、それでもなお、特定の場所との関係性を保ちつつ、共通の紐帯を育んでいることを示した。

③ 山梨県早川町内の複数の山村集落において、信仰や関連する慣習、それに対する地域住民の認識に焦点を

当てた現地調査を行い、その結果をまとめた。(雑誌論文②)

寺や氏神に関連する比較的大きな行事だけでなく、山の神様や蟲封じなど山村集落に存在する細かな慣習や信仰の実態を明らかにした。これらの慣習や信仰のあり方は、地域住民による自然認識や資源管理にも影響を与えていた。自然資源の利用と深く結びついた信仰であり、資源利用の在り方の変化が信仰の在り方にも影響を与えていた。

早川町のフィールドミュージアム広報誌上で調査結果を公表したことで、若い世代やＩターン者などを含む対象地域にかかわりを持つ様々な人に対して、資料として提示することができた。

(2) 他出者による山村集落の資源管理の可能性と限界を検討した。

① 他出者が山村集落に果たしうる役割とその特性を整理した（その他①)。

非居住世帯も含めた他出者が、共同作業や祭りなどを通して自治組織の一員としての役割を継続的に果たしていた。親が集落に居住しなくなった後も他出者が山村集落にかかわり続けていたこと、家のメンバーとしてのみならず村のメンバーとしても他出者が一定の役割を果たしてきたことが、事例から明らかになった。

集落で過ごした経験を持ち、その後も集落に継続的なかかわりをもっていた他出者は、集落の自然・歴史に関する知識、技能、作法を共有し、居住者、他出者らとの間に親交と仲間意識をもっていた。それに加え、家産を所有し、先祖に関する事柄や他の家との結びつきに関する事柄へもかかわり得るといった、家の成員であることに起因する特性ももつ存在であり、家や区の意思決定にかかわり得る存在だった。他出者は、集落への継続的なかかわりによって得られた経験的特性に加え、従来の家の成員でもあることから、家産や先祖などに関する事柄にもかかわれるという外部者では獲得しにくい特性をもっており、重要な存在だった。

しかし、災害や不祝儀のような突発的な物事に対しての対応や、多少の労力であっても日々継続的に行う必要がある仕事に関しては、居住していないためにその役割に限界があった。

集落へのかかわり方や生活上の重きのおき方は、人によって様々だった。行事に限らず出身山村を日常的に訪れ、耕作、養蜂、家屋の手入れなどを行い集落のケ（日常）の側面を支える他出者、お盆やお彼岸の他、区の年間の行事予定表を参考に総人足や祭りなど特定の日程に帰省し集落のハレ（非日常）の側面を支える他出者がいた。

(3) 現在およびこれからの山村集落の資源管理において、重要と考えられる視点を導出した。

① 山村集落にとっての他出者の役割だけでなく、郊外に暮らす他出者・他出二世にとっての山村集落がもつ価値を適正に評価する必要性を示した（図書②)。

森林、神社、寺は、新たな居住先ではかかわることが難しい資源だった。他出後もそれらの管理が維持されてきた背景として、単なる義務と責任だけではなく、維持するに値するだけの価値や役割が認識されていた側面がある。

空き家を売ることで利用したい人が利用できるようにすることや、老朽化した家を倒壊の危険がないよう解体することは一部では必要なことであるが、一方で、空き家を管理する負担ばかりが強調され、空き家の解体ないし売却が極端に加速することが危惧される。実質的な二地域居住者として他出者が村に果たしてきた役割や、彼らが村に対して持っている思いを評価し、それが発揮されるための施策も必要とされることを示した。

② 過少利用化における資源管理において、「やれる範囲」でのかかわりの承認の重要性を示した（図書①)。

耕作放棄地の増加、二次林の荒廃、伝統芸能の衰退といった、日本の農山村が抱えている課題の多くは、利用や管理を十分に行うことができない過少利用の問題として捉えることができる。過少利用下における資源管理を考える上で、「やれる範囲」でのかかわりの承認が重要であることを示した。

役割を「やれる範囲」で共有するメンバーを承認することによって、メンバー数がさらに減少したり、過少利用の度合いがさらに深刻化することが防がれていた事例を示した。ある役割を共有するという時、それは必ずしも各メンバーの均等な共有を意味しているわけではなく、各々の状況に応じて担える役割を担うことが認められていた。

「やれる範囲」でのかかわりを承認することは、居住者などより負担が重くなる側が、他出者や外部者に

よる不十分な・一人前ではないかかわりを了承するということでもある。このことは、かかわりの度合いの異なる多様な人々の共同による資源管理の在り方を考える上で重要な視点となり得ると考える。

＜引用文献＞

江成卓史（2000）都市住民による山林・農地管理への課題と展望－里山の市民活動フィールドとしての比較から－、ランドスケープ研究、63(3)

大野晃（1991）山村の高齢化と限界集落－高知山村の実態を中心に、経済、1991 年 7 月号

大野晃（2005）山村環境社会学序説－現代山村の限界集落化と流域共同管理、農山漁村文化協会

小田切徳美（2009）現代のむら、坪井伸広・大内雅利・ 小田切徳美編著、現代のむら ：むら論と日本社会の展望 、農山漁村文化協会

熊谷苑子（2004）二十一世紀村落研究の視点、年報村落社会研究、39

デランディ，ジェラード（2006）コミュニティーグローバル化と社会理論の変容、NTT 出版

徳野貞雄（2010）縮小論的地域社会理論の可能性を求めて:－都市他出者と過疎農山村－、日本都市社会学会年報、28

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① Okubo, Mika, Abrar Juhar Mohammed & Makoto Inoue（2015）Out-migrants and Local Institution: Case study of a depopulated mountain village in Japan, *Asian Culture and History*, 8(1): 2-9.（査読有）
http://dx.doi.org/10.5539/ach.v8n1p1

② 大久保実香（2017）暮らしに息づく願いと祈り，やまだらけ，80，NPO 法人日本上流文化圏研究所：1-4.（査読無）

〔学会発表〕（計 7 件）

① 大久保実香，「消滅」しなかった集落，琵琶湖博物館研究セミナー， 2014 年 7 月 18 日，琵琶湖博物館(滋賀県草津市),［口頭発表］.

② 大久保実香，現代の山村における資源の利用・管理と移動，総合研究「前近代を中心とした琵琶湖周辺地域における自然および自然観の通時的変遷に関する研究」研究会，2015 年 1 月 25 日,琵琶湖博物館（滋賀県草津市），［口頭発表］.

③ 大久保実香，湖上の島と二地域居住，琵琶湖博物館研究セミナー，2015 年 4 月 16 日，琵琶湖博物館（滋賀県草津市），［口頭発表］.

④ 大久保実香，引き継がれるもの、そうでないもの：現代山村の変化の背景について，日本村落研究学会関西・東海地区研究会， 2015 年 9 月 23 日，キャンパスプラザ京都（京都府京都市），［口頭発表］.

⑤ Okubo, Mika, Depopulated community and its resource management. 15th Biennial Global Conference, International Association for Study of the commons, 26th-30th May, 2015, Edmonton (Canada) , [Poster Presentation].

⑥ 大久保実香，出身集落と他出先市街地との二地域居住，琵琶湖博物館研究報告会，2015 年 6 月 21 日，琵琶湖博物館（滋賀県草津市），［口頭発表］.

⑦ 大久保実香，現代山村における他出者の重要性，琵琶湖博物館研究セミナー，2016 年 4 月 15 日，琵琶湖博物館（滋賀県草津市），［口頭発表］.

〔図書〕（計 3 件）

① Okubo, Mika (2015) Task-sharing, to the Degree Possible: Collaboration between Out-migrants and Remaining Residents of a Mountain Community Experiencing Rural depopulation, In, M. Tanaka and M. Inoue ed., Collaborative Governance of Forests Towards Sustainable Forest Resource Utilization, University of Tokyo Press, 135-162.

② 大久保実香（2016）郊外育ちの私と山村，奥田裕規編,「田舎暮らし」と豊かさ－コモンズと山村振興，日本林業調査会，30-45.

③ 大久保実香（2016）手仕事を次の世代に受け継ごう，第 24 回企画展示 20 周年記念びわ博カルタ見る知る楽しむ新発見，滋賀県立琵琶湖博物館,70-71.

〔その他〕（計 1 件）

① 大久保実香（2016）現代山村における他出者の重要性，東京大学大学院農学生命科学研究科博士学位論文.

６．研究組織

(1)研究代表者

大久保 実香（OKUBO, Mika）
滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・学芸員
研究者番号：50636074